

「俳句」単元の計画の作成とその授業研究実践報告 ——野口雨情の韻文指導観をもとに——

金 田 啓 子

Abstract

In Tisho period, Noguchi Ujo, the author of children's songs, and Awano Ryutaro, elementary school teacher, encouraged the merit of the verses which were written without contemplation. Because they thought that children's mind could be expressed in an instant. I tried to apply it to National collage of technology education. The students in the school are 15-18 years old, not so little age. But, generally, it is said that recently teenagers become younger in spirit. So I think teachers should understand them deeply and should help them. This time, I tried to analyze *haikus*, one of verses, written by students and guess their mind and life. Then it has been shown that the verses written without contemplation have merit to understand students' mind though it is not so artistic.

キーワード……俳句 生徒 感情 生活

1. はじめに

筆者は、これまでに大正期の童謡作家である野口雨情の韻文教育観について研究して来た。雨情は、韻文の中でも特に童謡による教育を唱導したのであるが、根本的には散文に対し韻文で表現することを強調していたと言える。北原白秋らが児童に児童自由詩を創作させることで芸術的な能力を養おうとしたことに対し、雨情は童謡詩を創作させる時に綴り方的要素を取り入れ、児童の生活を教師等の大人がそこから把握するというのを重要としていた。雨情が児童創作の童謡を通して児童の生活を読み取ろうとしていたことは、拙論『夕焼論争』にみる童謡像の多様性の実相⁽¹⁾、「栗野柳太郎の教育実践における童謡の役割」⁽²⁾等に研究発表した。なぜ散文でなく韻文に綴り方の要素を求めたのかという点については次の推測にとどまったままである。

①リズムとして口から出るため、瞬間的な感情が表れる。またリズムという一定の拘束を設けることで、強く述べたい事柄だけが表現として残る。

②創作者以外の教師や児童も、リズムを共有することによって創作者の表現したい心情に共感しやすい条件ができる。

上記の内容は推測であるが、実践で試みる価値はあると考える。なぜなら、野口雨情の推薦で出版され

た児童の創作童謡集『蝙蝠の唄』⁽³⁾には、例えば次のような、説明的な散文では表しきれない率直な感情が表れているものが多く載せられているからである。

とりやのをちさん

死んぢやつた

しなびつつらで

あをいつら。⁽⁴⁾

これは、一見揶揄しているものと捉えられそうなものである。大正 11 (1922) 年の論争の際に、野口雨情・栗野柳太郎を批判する立場に立った横瀬夜雨らは、これを悪口であり価値のないものであるとした。しかし次に挙げる、指導者の栗野柳太郎のこの作品に対する批評をみると、芸術的な価値とは異なった捉え方を垣間見ることができる。「これはこの子供の前の鳥屋のをちさんが急になくなつた時に、この子供が生れて始めて人間の死顔といふたましい現実を見て突差的に痛感した、死の悲哀が謡となつて出たのであります。よく味つて見ると決して大人達がいふ可哀想とか気の毒とかいふ様な義理一辺の薄ッぺらなものでなく、実に大人には云ひ得ない程の深刻なものであります」⁽⁵⁾。ここから考えると、「突差的に痛感した」ことが「謡となつて出」ることが上記の①に、教師やその他の児童を含む創作者以外の者が「よく味つて見る」ことが上記の②に当てはまると考えられる。それゆえ、韻文は、作文のような説明的散文には表し得ない、児童の強い感情を瞬間的に表す要素を含んでいると考えられるのである。

筆者は、このことを高等専門学校生（高校生と同年齢の生徒）にも応用できるものとして、韻文の単元である俳句の学習時間に取り入れることを試みたのである。今回は生徒自身に俳句を創作させたが、作品の芸術性を向上させるよりも、教師が生徒の日常生活における感情等を捉えるための試みとして実践した。ゆえに、本報告も特にその観点からまとめる。

なお、句会形式を取り入れることで、自分自身が創作に責任を持つこと、自由な発言の機会を多く持つこと、お互いの作品をじっくりと鑑賞すること、の三点を可能にし、一斉授業ではできない活動を展開した。これは、生徒が主体的に動くことができるための工夫である。

2. 学習指導の実際

2-1. 年間シラバス

今回の試みが、年間授業計画のどの部分に位置を占めているのかを示すために、初めにシラバスを示しておく。⁽⁶⁾

<科目名> 「現代文」・「古典」 <単位> 3 <年間授業時間数> 89

<曜/限> 月曜日 5限・火曜日 3限・火曜日 4限

<対象学年> 機械工学科二年次生 <人数> 46名

<概要> 教科書教材の読解が中心となるが、高専生が持つべき教養の力がつけられるよう、読む・書く・聞く・話す・言語事項の要素をまんべんなく取り入れる。そのために、各自の作業時間を十分にとること、提出物を多くすること、発言の機会を持つためにグループ活動を取り入れること、などを心掛ける。「国語表現Ⅰ」の要素もこの科目の中で取り入れる。レポートの書き方等、特に時間を設けて行うものもあるが、大半は読解を目的とした授業と連動して行う（小説読解の中での疑問点に対応する形で意見文を作成する、評論文を読み、文中に書かれている材料を基に報告書を作成する、等）。なお、ここに言う「高専生が持つべき教養の力」とは、次の<達成目標>を表した。

<達成目標> ・読むことを通して他者の立場を理解する力を養うとともに、自分自身の表現方法を身につける。

・レポートの書き方、調査報告の仕方等、実用的な国語能力を身につける。

・作品に触れ日本文化を知るだけでなく、自国の文化に対する自覚と考えを持つことで、世界における自分の位置を見定める。

<授業計画>

前期 中間考査前 授業時間数 22 内容 現代文

1～6 いちはつの花－短歌抄－

◎7～11 白牡丹－俳句抄－ 本報告で扱う単元

12 国語表現

13～22 私の個人主義

前期 期末考査前 授業時間数 21 内容 古典（古文）

1・2 テスト返し（復習）・古文文法確認

3～9 土佐日記

10～18 伊勢物語

19～21 枕草子

後期 中間考査前 授業時間数 25 内容 現代文

1～3 テスト返し（復習）・永訣の朝

4～13 言葉の宇宙

14～25 城の崎にて

後期 期末考査前 授業時間数 21 内容 古典（漢文）

1～3 テスト返し（復習）・漢文文法確認

4～9 論語

10～15 唐詩（孟浩然・李白・杜甫）

16～21 項羽と劉邦（四面楚歌）

<成績評価の方法と基準>

定期考査の素点に、提出物の評価（5段階で評価）を加える。

<使用テキスト>

検定教科書『国語総合 現代文編』 東京書籍⁽⁷⁾

2-2. 単元 白牡丹—俳句抄

○単元名 生活の中の身近なことを俳句で表現する。

○単元目標 鑑賞した（する）短歌や俳句を参考にし、俳句という韻文を自分自身の表現方法として身に付ける。さらに、俳句を創作し、第三者に心情や情景等を伝える。

2-2. 指導計画

全5時間 実施日：平成16年4月26日～5月11日

第一時

学習内容 前単元の短歌の授業で学んだ、写実主義と浪漫主義の二系統を思い出す。俳句が子規に始まっていること、写実主義の流れが強いことを理解する。また季語等、俳句のきまりを確認する。

学習活動 ○ 俳人の系譜を図説で確認し、歌人の系譜と比較する。

と指導 <指導>写実主義と浪漫主義の特徴を、指名して確認する。写実主義の正岡子規の流れに始まっていることを説明する。

○ 子規についての知識を得る。

<指導>俳句の改革運動や夏目漱石との関係、病気等について簡単に説明する。

○ 子規の一句目「鶏頭の十四五本もありぬべし」を見て、俳句が短歌よりさらに簡潔であることを理解し、ここに詠まれている情景を想像する。

<指導>一句目「鶏頭の～」を板書し、分かりにくい語句のみ隣に意味を書き込む。子規がどのような状態でよんだのかが分かるように間接的に話をする。指名し病気であることを確認する。

○ 一句目の季語が「鶏頭」であることを押さえる。鶏頭の花を知る。

<指導>季語に印をさせ、指名して語句を答えさせる。カラー写真を見せてこの花がどの

ような色・形態であるかを知らしめ、印象を持たせる。季節を教える。

- 一句目を正確に解釈する。

<指導>状況をもう一度まとめて話す。文法的に注意する点「ぬべし」を説明する。指名し解釈を板書させる。解釈を見ながら文法をもう一度説明する。

第二時

学習内容 単元の後半で、各自が俳句を創作することを意識しながら、子規の二句目と虚子の一句を解釈する。表現の工夫にも着目する。

- 学習活動 ○ 単元の後半で俳句を創作することを念頭に置く。

<指導>自分が句を作ることを意識し、表現等に気を配りながら鑑賞すべきことをこたわる。

- 子規の二句目「糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな」を解釈する上で必要な知識を得る。

<指導>この句を板書し、指名して季語が「糸瓜」であることを指摘させる。「仏」について、普通は何を意味するか尋ね、死んだ人を表す時に用いられる語であることを示す。子規は死に瀕していたことを思い起こさせる。痰と結核の関係について話をする。「つまりし」「仏かな」を文法的に説明する。

- 子規の二句目「糸瓜咲いて～」を解釈する。各自ノートに書く。代表者が板書し各自意味を確認する。

<指導>直訳でなく、状況を踏まえた解釈を書くよう注意する。「仏」という客観的な表現が死を悟っていることを表していることまで自分で気付くことができるようヒントを出す。各自の作業の間は机間巡視で個別指導を行う。

- 病床から見る糸瓜がどのようなものであったかを考える。

<指導>糸瓜の役割＝日除け・痰を切る、について説明する。「痰一斗～」の句を紹介する。痰を切る糸瓜ももう間に合わない、というニュアンスを伝える。

- 虚子の「白牡丹といふといへども紅ほのか」を解釈する上で必要な知識を得る。

<指導>この句を板書し、季語がどれであることを自主的に答えさせる。カラー写真を見せ、牡丹の印象を持てるようにする。「紅ほのか」とはどのような状態であるかを想像させる。「いへども」を文法的に説明する。

- 虚子の「白牡丹～」を解釈する。各自ノートに書く。代表者が板書し各自意味を確認する。

<指導>「いふといへども」というもってまわった言い方と「紅ほのか」という簡潔な言い方との対照に気付かせ、発見の新鮮さを踏まえながら解釈できるようにする。各自

の作業の間は机間巡視で個別指導を行う。

- 写実の手法を確認する。

<指導>二句の工夫にもう一度注意を促し、創作の参考にさせる。対象物をよく見た後にどのような表現をするかということに考えを向けさせる。

第三時

学習内容 蛇笏、汀女の句を鑑賞する。句会と句作について説明。自作の俳句等を紹介する。

学習活動 ○ 蛇笏の「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」と汀女の「咳の子のなぞなぞあそびきりもなや」の句の状況を想像する。

<指導>二句を板書し、生徒に第一印象を持たせる。

- ヒントだけをもとに各自解釈する。

<指導>「くろがね」が鉄であることの説明、「鳴りにけり」「きりもなや」の文法的説明を短時間で行い、「秋の風鈴」と「咳の子のなぞなぞあそび」とはそれぞれどういうことかと問いかけて解釈させる。各自の作業の間は机間巡視で個別指導を行う。

- 代表者が板書し各自意味を確認する。「秋の風鈴」はどのような印象を与えるかを考える。「咳の子のなぞなぞあそび」がきりがないのはなぜかを考える。

<指導>代表者の解釈を見ながら、上記の二つの質問を問いかけ、自主的に答えが返ってくるようにする。「くろがね～」の句の物寂しき、「咳の子～」の句の母親らしさを自ら実感できるようにする。答えがなかなかまとまらないようであれば、前句に関しては「鉄の風鈴はどのような音がするか」「秋の風にはどのような雰囲気があるか」等、後句に関しては詠み手と「咳の子」両者の立場になり、「風邪をひいている時にはどのようなことをするか」「そのような時になぞなぞをするのはどのような心持か」「きりがないと思いつながらなぞなぞに付き合うのは誰だと思ふか」等の質問を繰り返す。生徒が異なる観点から答えた場合は、否定せずに、なぜそのように解釈ができるのかを説明させる。よく吟味してその解釈が可能かどうかを生徒たちと考えて行く。

- 句会についての知識を得る。

<指導>句会についての説明をプリントを使ってする。ゴールデンウィーク中の課題提示し、季語一覧を配布する。教師自身作の高校時代の句を紹介し興味をひく。句作については、授業で鑑賞したものを参考にはしてもらいたいが、まずは自由に作ってみよう指示する。短歌の授業で学んだ浪漫主義の手法を参考にすることも有効であることを示す。

第四時

学習内容 ゴールデンウィーク中に創作した俳句を推敲し、提出用・句会用の句をまとめる。グループ分けをしてリーダーを決め、句会の具体的な進行について理解する。

学習活動 ○ 自作の句を推敲する。二句とも提出用の紙に書き提出する。句会用の句を選び、短冊に清書する。

<指導>見た目が良いことよりも、実感が伴っていることが大切であることを指摘する。机間巡視の中で個別指導を行う。

○ グループに分かれる。リーダーを一人決める。リーダーがメンバーを記録し、次時の句会で実際にどのように動くのかを各自が理解する。

<指導>プリントを用いて句会の進行を説明する。できるだけ具体的に例をもって示し、この時点で流れをのみこめるようにする。

第五時

学習内容 句会を行い、お互いの創作した俳句を鑑賞し合う。

学習活動 ○ 句会。(グループに分かれる。→リーダーが各自の短冊を集めてシャッフルし、メンバーに無作為に配る。→各自、配当されたものを清記用紙に写す。→各自鑑賞し、良いと思ったものを一句選ぶ。理由も書く。→発表し合う。得票数を記録する。)

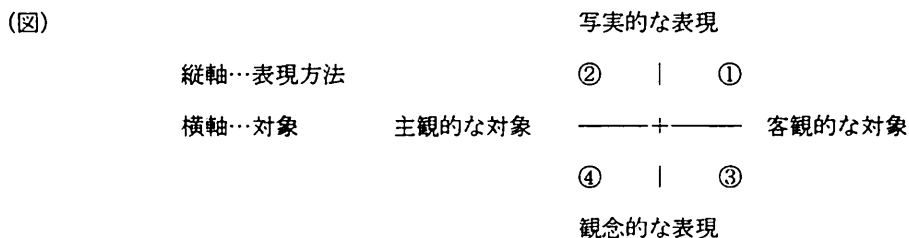
<指導>本来ならば清記用紙は一枚であるが、各自がじっくりと鑑賞できるように人数分の清記用紙を作る。各作業の時間のとり方は、全グループの活動の様子を見ながら柔軟に決める。

○ 各グループで得票の多かった者が、自分の句を黒板に書く。全員でそれを鑑賞する。
<指導>各句の良い点を簡単に紹介する。状況について本人に確認する。詠みたかったことについて、なぜそのように表現したのかについても説明させる。黒板に書かれた句をみてどのような感想を持ったか指名して訊き、自分たち(俳人ではなく一般の生徒)にこのような表現が可能であることも実感させる。

3. 作品の分類

本報告は、授業が終わった後の処理を中心として扱う。この單元においては、生徒が表現の力をつける一方で、教師が生徒の感情等を捉えるための試みを重要な柱としたからである。今回は、二つの軸での分類を試みた。一つは表現方法、もう一つは対象である。前者に関しては、写実に徹しているかそうでない表現方法をとっているかを基準に、後者に関しては、対象を自分に定めているか客観的に見るこ

とのできる第三者に定めているかを基準に分類を行った。図示すると以下の通りであり、四つの枠にくることができる。



①は客観的な対象を写実に徹した表現で表したもの、②は自分の感情や行動といった主観的に捉える対象を写実的な表現で表したもの、③は客観的に捉えられる対象を主観的表現（感情を形容する語など）で表しているもの、④は主観的な感情等を主観的表現で表しているものである。次章では、①～④のそれぞれのタイプから数句ずつ取り上げ、検討をする。

4. 事例とその検討—①～④のタイプ別に—

- ① a. 春の海視界良好にじむ佐渡
b. 初物の筍小さめ苦みあり
- ② a. 光る汗共に輝く水面下
b. においたつ木々のにおいを吸う自分
- ③ a. 目がさめて、嫌気が差した梅雨の朝
b. 目がさめて、やる気が沸いた五月晴れ
c. 五月雨や新入部員さぼりぎみ
- ④ a. 最悪だ
田植えをすると腰痛い
b. 懐かしい
蛇から逃げる
過去の僕

①は、何に対して目を向けるのかという視点から生徒の心情や生活を読み取ることができる。aには「佐渡」とあるが、新潟県民であれば、海に行った時に佐渡島が見えるかどうか目に行くものである。天候によって見えるとは限らないものだからである。春という季節は、特に佐渡島が見えたり見えなかったりする。そのような春の海に出た時に、視界いっぱいに見渡せる光景に出会った。その中には佐渡

がにじみながらもしっかりと見ることができた、ということが読み取れそうである。この光景を詠んだ感動に近い心情には共感を覚えることができる。bは、食物という生活に密着した題材を選んでいる。ただし、「初物の筍」という言葉が、日常の食事ではないことを物語っている。まず、このような題材に目を向けるということが、詠み手の筍に対する思いを表すと同時に、日常の中から観照の対象を見つけ出す目が養われていることを示している。そして、嬉しさをもって迎えた筍であったが、実際には思ったより小さく、味も旬の時期より苦いものであった、という現実の直視、また、それでも失望ではなく苦いながらもこの時期初めて食べたことを嬉しく思っていることが、「初物の筍」に始まっていることから分かるのである。

②は、客観的に詠んでいるように思われるが、対象が自分であることから多少の主観が混入しているものが多い。そこから作者の表現したい感情や心にとまっていることが直接的に伝わって来る。aは水泳の場面であろう。自分で汗をかいていることを意識していることがこの句に表れており、苦痛ではなく一生懸命やっていることの自覚の表れであることは、「汗」と「輝く水面」とを重ねていることから分かるのである。また、実際には水面下では見えない自分の汗を詠むには連想が働いていると考えられるが、ここからも自分の思いが、一生懸命さの表象としての「汗」という形に表れていると考えられる。bは、「においがする」ではなく「においを吸う自分」とまとめていることから自分を客観視しているようにも思えるが、授業で扱った子規の「糸瓜咲いて～」の句と比較すると、冷静な描写とは異なるように感じる。それは、自分を「仏」と諦観している子規の句とは違い、「吸う」ことで「木々のにおい」に動作を仕掛けていることが分かり、それが「自分」の動作であることを示すことは、かえって作者がそのおおいに存分に感じ入っていることを強調しているからであろう。

③は、対象物は自分ではなく第三者であるが、それに対する作者の思いがストレートに表れている。a、bは同じ作者のものである。単純ではあるが、対象としている「梅雨」と「五月晴れ」が対照的であり、それぞれに対する素直な感想が述べられている。気持ちを描写等に託すことなく述べているため、平面的な印象を与えるが、俳句を詠むために時間を費やすことなく、その時に感じたことをそのまま表出させていることが分かる。cは、「新入部員」が「さぼりぎみ」であるのだから、見たものを書き表しているという捉え方もできる。しかし、「さぼりぎみ」という言葉は、対照をよく見た結果というよりは、作者自身が強く感じていると捉えるべきであろう。作者はこの春に二年生になったばかりである。四月より部活でも上級生として新入生を迎え、張り切っている時期の「五月雨」なのである。作者にとっては新入生の雨という状況の中での態度がもどかしく思える。上級生としての自覚が芽生えていることが表れているとともに、まだ新入生を静観する域には達していないというところから、上級生になったばかりの新鮮さも伺うことができる。ここに言う静観とは、「さぼりぎみ」という感情が前に出ているような表現でなく、客観的に表すということである。つまり、写実でない感情的な表現方法を使っ

たこと、そのこと自体によって、上級生になってまだ間もない生徒の様子が表されているのである。

④は、自分自身のことを観念的な言葉で詠んでいるため、感情はストレートに表れている。a、bは連作である。本校には兼業農家の家から来ている生徒も多く、彼らはゴールデンウィークに田植えの手伝いをする。aはその田植えのつらさを詠んだもの、bは、田植えの時に昔は蛇を怖がっていたのを、今では慣れて平気になっているということを詠んだものであろう。③と同様、描写表現はなく、観察等の態度も見られないが、「最悪だ」と思った瞬間、「懐かしい」と思った瞬間、この時の一瞬の気持ちがりリアルに伝わって来る句である。これは、それぞれ感情的な言葉から句を始めている効果でもあると思われる。

5. 本形式の学習指導の可能性と課題

以上の検討結果をもとに、授業における効用性を考えてみる。まず、①②③④の順に、感情がそのまま言葉になっているということが分かる。しかし、④に近づくにつれて生徒の状況や感情の読み取りが容易であるということだけでなく、それらの表れ方に違いがあることに気付かされる。①②と③④とで大きく異なる点は、俳句を作るために時間が経過しているかどうかということである。③④は瞬間的な感情が先にあり、それを俳句という形になるまで余計な部分を削り、特に強い部分だけを残したものである。したがって①②に比べると詠み出すまでに要する時間は少なく、同時にその作品に触れた教師は、即時性の生徒の思いを捉えることができる。①②は俳句を作ることが目的であり、少なからず俳句を作るために時間を必要とする。そのために生徒の観察力とそれを言葉に表現する力は伸ばされることとなり、国語の教科として重要な役割を担う。しかし、生徒の生活を捉えようとする時には、生活の中のありのままの感情の中でも特に表出したい部分を、強く韻文の形に表している③④の方法は、意義あるものであると言える。野口雨情と栗野柳太郎が綴り方だけではなく韻文にも生活感情を表す要素を求めた理由はここにあると思われる。つまり、生徒の生活の中で起こったことや思ったこと等は、綴り方のように説明をもって表されるものと、韻文のように瞬間的に強い部分が表されるものと、複合的に触れることで教師はより把握することが可能になるのである。特に、まだ未熟な面を多く残す年齢でありながら、担任との接触時間も少なく、国語の教科以外では思ったことを教師に向けて表現する機会をあまり持たない高等専門学校生においては、有効性を発揮できる単元であると考えられる。

ただし、これからの研究を重ねるべき指導上の課題もある。瞬時に現れるリアルな感情、その中でも特に強い部分だけが句という形になるように余計な言葉を削ぎ落として行くことは、意外に難しいものである。俳句を作ることの方を目的にするのではなく、先にある感情を歌い出すことを目的とすると、別段に詠みたいと強く思った感情を持ち合わせていない生徒は、誰かに訴えたいわけでもない事柄を

五・七・五になるように引っ張り出すというだけのことになりかねない。例えば下の句のように、安易な字数あわせに落ち着かないように指導しなければならない。

「紅葉狩りしたことないけどつまらなそう」

「墓参りしたことあるけどつまらない」

また、下記のように①②とも③④ともつかない句は、説明的または傍観的な印象を受ける。

「JRA一年くくる有馬記念」

「春の日は昨日に比べてボウズ増す」

一句目は、説明をしているに過ぎず、それに対する作者の思いは表れているとは言えない。そして二句目は、目にした情景を捉えてはいるが、写実のように主体的に観察を行ったというよりは受動的に目に入ったことを詠んだように思われる。しかし主観的感情を基にして捉えているとも感じられない。やはり作者の対象に対する感情は読み取れず、ただの傍観に終始している。これらのものは、主体としての生徒が存在しておらず、観察力・描写力を伸ばすといった国語能力の涵養になってもいなければ、教師が特に把握すべき生徒自身のリアルタイムの情報ともなり得ていない。状況・感情を生徒が瞬間的に表すためには、まず、課題の提示の仕方が問題となるであろう。今回は授業では写実主義の句の解釈を中心としていたが、この実践を通して、教師が生徒の日常の過ごし方やその中で感情を受け止めるには、瞬間的に詠み出した句も有効であると判断できる。ゆえに、写実主義の鑑賞とは別に、主観的な、平易な句に触れる機会を設けることも今後考えて行きたい。また、一定期間内の課題とせずに、日常的に身近なことを韻文で表すことを習慣化することも有効ではないかと考えられる。

なお、参考のため、生徒が創作した俳句と句会を結果を資料として最後に挙げておく。()内は提出された句のうち、句会に出さなかった句である。グループは1班から7班まで作ったが、ここには順不同でグループAからグループGまでとした。句の後の数字は、句会での得票数を表す。

グループA

目がさめて、嫌気が差した梅雨の朝 3 / (目がさめて、やる気が沸いた五月晴れ)

春風にほのか匂う桃の花 1 / (ホームレス冬になってもタンクトップ)

五月晴れ日ざし強くて日焼けした 2 / (五月雨の今日の天気も雨ですか)

スキー部の夏はマラソンつかれるよ 1 / (五月雨テンション低くしてくれる)

冬の日のふりつもる雪犬は喜ぶ 1 / (新年はいつも期待であふれる)

雲流れ五月雨止みて日暮れけり 0 / (鯉のぼり今年も倉の肥やしかな)

静かさや窓にしみ入る蛙の声 0 / (水泳部冬になったらマラソン部)

秋の日の高専祭り工志祭 0 / (光る汗共に輝く水面下)

グループB

- タンポポの / (山の色
綿毛舞う舞う / 白から緑
春の日々 3 / 変わりけり)
休みあけ雨で終わった一週間 1 / (空青く大地は緑に染まりだす)
夏の日空に広がる白い雲 1 / (桜の木緑広がる初夏の日)
素晴らしい / ちまき食べ
ちまきのうまさ / またちまき食べ
罪深い。 0 / ちまき食べ。
冬の日みんなこたつでねすごした 0

グループC

- 渡り鳥ばたばたばたばた飛んでいく 3 / (鈴虫が僕のごはんにうじゃうじゃと)
コスモバルク無念の2着皐月賞 1 / (JRA一年くる有馬記念)
軒下で単作はげむ親ツバメ 1 / (銜して山ほととぎす鳴いている)
桜咲き春のおとずれかんじゆく 0 / (雨しづくあじさいの花にキラキラと)
梅雨があげそれから夏がやってくる 0 / (五月雨の湿気でカビがはえてくる)

グループD

- 青色の勇姿にわいた六月の唄 2 / (夏休み一晩寝れば始業式)
れんきゅう中毎日毎日アルバイト 2 (れんきゅう中毎日昼食カップメン)
さくらのきうめつくされてる悠久山 1 / (れんきゅう中毎日やってたアルバイト)
春がきた桜満開青いそら 1 / (春の海視界良好にじむ佐渡)
正月は全てが白し朝の霜 0 / (五月雨や新入部員さぼりぎみ)
うぐいすの鳴き声とびかう昼の過ぎ 0 / (潮干がり掘っても掘ってもアサリ出ず)

グループE

- 雨蛙今年も夏がやってくる 2 / (鯉のぼりいつからかもう見ていない)
釣ってからさばいて食べた初鯉 1 / (暮夜中に鳴くとうるさいな)
夏の山雲がかかりし快晴日 1 / (雨蛙田植えの頃には大合唱)
雨降ってじめじめしちゃう季節かな 1 / (風ふいてなかなかきれいな鯉のぼり)

五月雨の

当たる水滴

冷たいな 0

グループF

こたつみかん聴けば切なし笑点のテーマ 3 / (夏休み花火観賞祭りのバイト)

むしあつさやる気が出ずにだらだらと 2 / (電車来ずバスには乗れず遅刻して)

春の日の散歩のおじさんたばこいっぶく 2 / (春の日は昨日に比べてボウズ増す)

春の日 目と鼻がづらい花粉症 0 / (山開き人々上る春の山 太陽に緑が光る四月の日)

桜舞う乙女の祭典桜花賞 0 / (ドラマ生む中山の坂有馬記念)

晴れた日に風にただよう花のかおり 0 / (においたつ木々のおいを吸う自分)

暑い夜小学校で花火する 0 / (雪の山スキーで転び雪ダルマ)

(単車乗り浴衣の美女と関越道 碓氷大晦日朝まで走れ初日の出)

※句会には別の句を出したが、個人名が示されているため、ここには表示しない。

グループG

家の田植え手伝うのは何のため 2 / (一週間あったが俺は何をした)

紅葉狩りしたことないけどつまらなそう。 2 (墓参りしたことあるけどつまらない)

鯉のぼり休日以外は箱の中 1 / (6月の湿気に弱るmy body)

東山緑深々夏近し 1 / (信濃川清水流れ美しい)

五月晴れ轟くディーゼル山越えて 0 / (初物の筈小さめ苦みあり)

懐しい / 最悪だ

蛇から逃げる / 田植えをすると腰痛い

過去の僕 0

3名欠席。うち二名は事前に句が提出されていたのでここに示す。あとの1名は、句の提出日も欠席。

(夏の日の夜は暑くて眠れない 暑き日に宿題するのはつらすぎる)

(掃り道夜の五月雨なかなかやまず 五月晴れ家から出ずに意味はなし)

<註>

- (1) 『現代社会文化研究』, 第 23 号, 新潟大学大学院現代社会文化研究科, 2002 年 3 月, (1)~(19) 頁。
- (2) 『現代社会文化研究』, 第 29 号, 新潟大学大学院現代社会文化研究科, 2004 年 3 月, (1)~(15) 頁。
粟野柳太郎は、当時の小学校の訓導であり、野口雨情と協力しながら童謡教育の実践を行っていた人物である。
- (3) 若柳小学校創作部編集, 米本書店発行, 大正 11 年発行。
- (4) 前掲書『蝙蝠の唄』, 108 頁。
- (5) 粟野柳太郎, 『実際研究 童謡と児童の教育』, 南天堂書房, 大正十年, 8 頁。
本著書の文章は、大正 11 年の新聞『いはらき』にも載せられている。
- (6) 国語科の代表者によるシラバスが公表されているが、筆者は独自にシラバスを作成し、年度始めに生徒に配布した。
- (7) 二次生は、科目としては「現代文」であるが、前期は『国語総合』の教科書を使用している。